

アジア舞台芸術祭
参加者インタビュー#01

木村龍之介さん／TCチーム演出助手

東大英米文学科でシェイクスピアの研究をする木村さんは、日本を代表する演出家・蜷川幸雄のアシスタントを経て、文学座付属演劇研究所の演出部に2年間、シェイクスピア・シアターで3年半に及ぶ俳優経験もあります。2年前に自らの劇団カクシンハンを立ち上げ、作・演出家としてシェイクスピア作品の上演に取り組んでいます。

「西洋の古典演劇を、非西洋の現代人がどのように上演し得るのか。日本の伝統的な様式美など近代以前の表現を持ち出すのではなく、自分の日常との接点を持ちながら現代的な表現を追究するには“自分が何者か”ということをもっと考えないといけないなと感じていました。

他チームの演出家たちが各国の伝統文化を強く感じさせる中、TCの表現が西洋的な演劇の方法論をベースにしていることに興味を持ちました」

幼少の頃シンガポールで暮らした経験もあり、TCチームの演出助手に立候補。チーム分け直後の懇親会で早速ディスカッションが始まりました。

「時間が限られている中で上演まで持っていかなくてはいけないこと、チーム同士が競争していること。だからこそ時間の使い方が濃密になる。TCの稽古は無駄がなく、指示も非常にクリアで、洗練されていると感じました。他者と出会いたくて演劇をやっていますから、制作現場での摩擦もまた表現に昇華されていくのが面白かった」

木村さんは録音した役者のエピソードをすべてテープ起こしし、演出家・通訳と協力しながら日本語の上演台本を作成。2日目の朝には台本を完成させました。

「TCの表現手法は西洋的ですが、エピソードを抽出していく中で当然、現代の日本人の生活が反映されていく。と同時に、古代から連綿と続くアジア的な感覚がどうしても出てきます。彼が村上春樹の小説を例に挙げたことも、共感しやすい接点になりました」

演出家は意図していなかったようですが、「米と稲」をテーマに役者から語られたエピソードには、原発事故の影響による食への不安も含まれていました。

「3.11は自分の劇団を立ち上げるきっかけにもなりました。現代は、シェイクスピアの世界に匹敵するくらい、大変なことが起きています。（今回のTCの作品は）

今の日本を反映している作品だったので、観客も色々なことを感じたんじゃないでしょうか。

国籍や背景が異なっても、人間が生活する上で普遍的に感じるようなことを、政治とは別の観点から共有できるということ。ひとつの物語を同じ場で共有できる演劇の面白さ・強さを改めて感じました」

シェイクスピア作品を通じて現代の日本人の困難や喪失を乗り越える作品を創作していきたい、そのために現代的かつ日本的な切り口を追究していきたいという木村さんのテーマに対して、今回の体験は“アジア”という新たな視点をもたらしました。

「これまではアジアに目を向ける機会があまりなかった。同時代のアジア演劇を見る、そういう文脈で自分を見るチャンスがあるということが大発見でした。今回制作された各国の作品をこれほど魅力的に感じたのは、西洋で生まれた現代演劇という表現や劇場という枠組みに対して、同じような困難さ・問題意識を抱えているからかもしれません。日本人だけでは突破できないことも、“アジア”でなら突破できるかもしれない。今後はこういう機会が10倍くらいに（笑）増えていってくれたらいいなと思います」